

特別展

鬼 高

—ONITAKA—

上里町の古墳時代後期



▲ 鬼高式土器 模倣坏

(大字七本木 窪前遺跡W-34住居址出土)

・ 会期：令和8年8月15日（土）～同12月6日（日）

午前9：00～午後7：00

毎月第2月曜・最終木曜日休館（祝日の場合開館、翌日休館）

・ 会場：上里町立郷土資料館 特別展示室

上里町立郷土資料館

ごあいさつ

この度は、特別展『鬼高－ONITAKA－ 上里町の古墳時代後期』にお越しいただき、誠にありがとうございます。

発掘調査によって、上里町で人々が集落を営みはじめたのは今から1700年から1350年以上前の古墳時代のことと考えられています。この期間は日本各地に巨大な古墳が造営された時期に当たり、我が国の国家形成が始まった黎明期とされています。

中でも今から1500年から1300年前の5世紀後半から7世紀の初頭にかけては、「古墳時代後期」と呼ばれる時期に当たり、近辺では行田市のさきたま古墳群や群馬県高崎市の保渡田古墳群、綿貫観音山古墳、藤岡市の七輿山古墳といった100mを越える大型前方後円墳が乱立した時期でした。現在のところ、上里町において前方後円墳は確認されていませんが、この頃の町内では突如として多くの集落が営まれるようになり、竈（かまど）や須恵器といった新しい文化が急速に受け入れられていった時期でした。

丁度この時期の関東地方の遺跡から広く出土するのが「鬼高式（おにたかしき）」と総称される土器の一群です。本展示では町内から出土した鬼高式土器を紹介しながら、古墳時代後期の人々の集落とその変遷をたどります。各時期の土器の形や色彩、雰囲気等の変化に注目しながらご見学ください。

それでは上里町の魅力的な鬼高式土器の世界をご案内致しましょう。

凡例

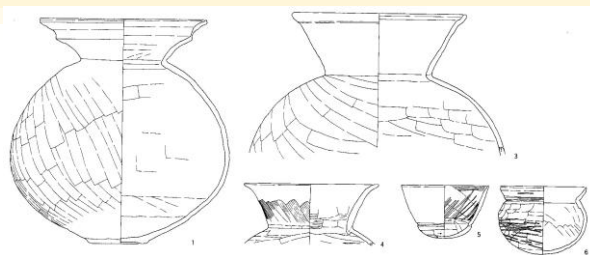
1. 本稿は、上里町立郷土資料館特別展『鬼高－ONITAKA－ 上里町の古墳時代後期』の内容を解説したものです。
2. 本展の概要は、以下のとおりです。
 - ・会期：令和8年8月15日（土）～同12月6日（日） 午前9：00～午後7：00
 - ・会場：上里町立郷土資料館 特別展示室
3. 本書の執筆は、上里町教育委員会 生涯学習課 文化財係 林 道義が担当しました。
4. 本展は林が企画し、大滝啓友ほか文化財係スタッフと共に実施しました。
5. 本展で展示した土器の年代は、利根川1982年、田中1995年等に依っています。
6. 本展で展示した資料は、断りのある場合を除き、上里町立郷土資料館の収蔵資料です。
7. 展示資料の多くは開発主体者及び地域住民各位のご理解によって町教育委員会が実施した発掘調査で出土したものです。ここまでの埋蔵文化財保護にご協力いただいた皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

第1章「鬼高」とは何か 鬼高式土器について

1. 君は鬼高式土器を知っているか？

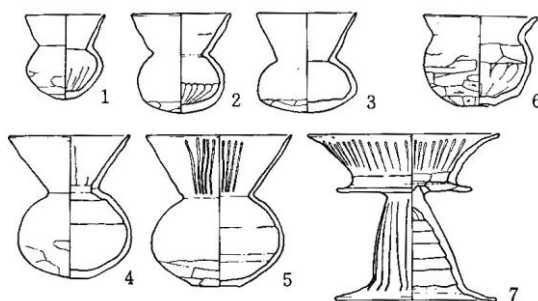
「鬼高式土器」とは、古墳時代後期の関東地方で流通していた土器の一群のことです。「鬼高（おにたか）」という言葉はあまり聞きなれない言葉ですが、一連の土器が初めて確認された千葉県の「鬼高遺跡」に由来します。

鬼高遺跡は千葉縣市川市に所在する集落遺跡で、江戸川河口部に位置していました。戦前の昭和12年（1937）に工場の建設工事によって偶然発見され、考古学者の杉原壮介（後の明治大学教授）によって発掘調査が行われました。この時、杉原は遺跡から出土した一連の土器を「鬼高式土器」と名付け、同様の土器が古墳の副葬品としても出土することから、遺跡と「鬼高式土器」が古墳時代に作られたものであることを突き止めました。さらに杉原は鬼高式土器より古い和泉式土器（東京都狛江市和泉遺跡出土）と、さらに古い五領式土器（埼玉県東松山市五領遺跡出土）を発見し、古墳時代に使われた土器は五領式→和泉式→鬼高式の順で移り変わることを発表します（右図）。



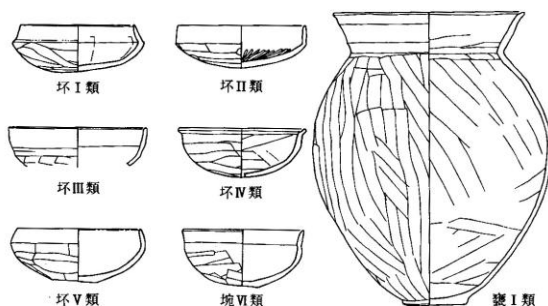
▲ 五領式土器（中堀遺跡第2号住居址出土）

田中ほか1997より抜粋



▲ 和泉式土器（愛宕遺跡出土）

埼玉県埋蔵文化財調査事業団作成、上里町史資料編より抜粋



▲ 鬼高式土器（若宮台遺跡出土）

埼玉県埋蔵文化財調査事業団作成、上里町史資料編より抜粋

その後、戦後の高度経済成長期には、各地で発掘調査が進み、これらの土器が関東地方の全域で出土することが判明します。各地で確認された鬼高式土器は、さらに多くの考古学者らの手によって研究が加えられ、地域ごとに土器の形の変遷をたどる「編年」が進められてきました（コラム1）。

さて、現在の考古学・歴史学の分野では、古墳時代は「前期（3～4世紀頃）」、「中期（5世紀頃）」、「後期（5世紀後半から6世紀末頃）」、そして「終末期（6世紀末～7世紀前半頃）」の大きく4つの時期に区分されています。このうち概ね五領式土器が古墳時代前期、和泉式土器が古墳時代中期、鬼高式土器が後期～終末期にかけて使用された土器と考えられています。そのため古墳時代後期から終末期は「鬼高期」もしくは「鬼高式期」とも呼ばれます。

2. 鬼高式土器の特徴 上里町の古墳時代後期の土器

(1)土師器と須恵器

そもそも「土器」とは、粘土を焼いて作った器（うつわ）のことです。古代の土器は大きく分けて二種類に分類されます。一つは粘土をへらや指を使って器の形にしてから素焼きにした「土師器（はじき）」と、もう一つは粘土をロクロで回転させながら形を作り、「窯」を使って焼いた「須恵器（すえき）」です。

須恵器を焼く「窯」は、「穴窯」といいます。主に古代の朝鮮半島から持ち込まれた技術です。燃料に大量の薪を用いて1,000度以上の高温で焼き上げます。そのため、完成した須恵器は硬く、灰色～黒色をした焼き上がりとなりました。特に高温で焼きしめられていることから、液体が浸透せず、水や酒等を貯蔵することに長けていました。また、火や熱に弱いという特徴があり、直火に当てると割れてしまいます。古墳時代後期の場合、集落内から出土する例はあまり多くなく、古墳や祭祀（お祭り）の跡等、宗教的な遺跡から多く出土する傾向にあります。



▲ 古墳時代後期における須恵器（1・2）と土師器（3・4）

特に右側の土師器2点は後述するように「模倣坏」と呼ばれ、左の須恵器坏をモチーフに作られたものでした。

一方の土師器は、焚火を用いて低温（といっても通常で800度ほどになる）で焼き上げるため須恵器より軟質であることが特徴です。窯を用いず焚火で焼き上げることにより、粘土に含まれる鉄分と空気中の酸素が結び付き、焼き色も赤サビの色である褐色～赤褐色をしています（表 土師器・須恵器それぞれの特徴）。また、須恵器とは異なり熱に強く、製作に特殊な技術や窯を用いないため、大量に作られ日用の食器として広く流通することになりました。

特徴	須恵器	土師器
焼き方	穴窯	野焼き
焼成温度	1000℃以上	800℃ほど
硬さ	硬質	軟質
色彩	黒～灰色	褐～赤褐色
耐熱性	弱い	強い
耐水性	強い	弱い
由来	朝鮮半島	国内

(2)鬼高式土器の特徴

鬼高式土器は、土師器に分類されます。これら鬼高式土器の種類には、坏、碗、高坏、甕、甑などがあり、発掘調査によって調理具や食事を盛るための食器として、あるいは須恵器と共に祭祀等の儀礼や儀式にも用いられていたことが分かっています。ここでは古墳時代後期の町内で一般的だった鬼高式土器の種類を紹介します。

①坏 つき

「坏」は飲食物を取り分けたり、盛り付けたりするための浅い食器です。現在の「取り皿」に当たります。

意外なことですが、鬼高式土器以前の土器では坏に当たる土器は皆無でした。そのため、取り皿を用いて食事を取り分けることが一般的になるのは鬼高式土器が登場する古墳時代後期になってからと考えられます。

・模倣坏 鬼高式土器の代名詞

鬼高式土器の坏にはいくつかの種類があります。古墳時代後期を通して最も多く出土するのは「模倣坏」と呼ばれるものでした。模倣坏は当時、流行していた須恵器の坏の形をモチーフにして作られました（参考：本書 p. 4 掲載写真）。

これら模倣坏は、古墳時代後期が始まる5世紀後半頃に登場し、古墳時代が終わる7世紀後半まで形を変えながら使用され続けました。登場したばかりの模倣坏は大型で厚手の作りなのが特徴です。しかし、このようにしっかりとした作りであったものが、時代が進むにつれ、小型で薄く、扁平な作りに変化していきます。このように模倣坏は時期ごとの形の変化が明確であることから、遺跡の形成された時期を考える上で大きなヒントとなります。



▲ 出現期の模倣坏

窪前遺跡X-32住居址（大字七本木/5世紀後半）



▲ 定着後の模倣坏

窪前遺跡W-34住居址（大字七本木/6世紀前半）

コラムⅠ 編年とは

出土した土器を分類し、その形態の変化をたどることを考古学では「編年（へんねん）」といいます。より平たくいえば、現在のファッションや音楽と同じように、遺跡から出土する土器や石器にも流行やブームがあります。出土した地層や状況等と照らし合わせながら当時の流行を研究することが「編年」といえます。

ところで考古学では編年は「年代のものさし」といわれることもあり、流行した土器の変遷を押さえれば、出土した土器の形態から遺跡や住居址等の年代を特定する上での根拠になります。

・原初坏/内斜口縁坏 模倣坏登場以前の坏

古墳時代後期に普及した坏には、模倣坏のほかに「原初坏」や「内斜口縁坏」と呼ばれる全体に丸みを持つボウルのような形をした坏が存在しました。いずれも先述した模倣坏よりも早い段階の5世紀中頃から後半に登場するもので、その後は模倣坏と併用されながら古墳時代後期の中盤にあたる6世紀後半には姿が見えなくなります。

また内斜口縁坏は、原初坏と同時期に流行するものですが、特に群馬県及び児玉郡周辺で多く出土するという特徴があり、その時期における上里町周辺の人々と群馬県の人々の交流を示す資料とされています。



▲ 原初坏

窪前遺跡 X-32住居址（大字七本木/5世紀後半）



▲ 内斜口縁坏

西福寺西遺跡 J-8住居址（大字堤/5世紀後半）

いずれの坏も模倣坏に先行して出現し、間もなく姿を消す土器です。

②高坏 たかつき

高坏は名前のとおり高い脚部を持つ土器です。食事の盛り付けや儀式で供物を添えることに用いられました。特に先述の坏が出現する以前には、日常の食器として用いられていたと想定されており、この高坏の上に蒸した米等の食事を盛り、直接、手でとって食べていたと考えられています。坏が普及する古墳時代後期の初頭まで遺跡から高坏が多く出土するため、日常の食器の主体であったと考えられています。町内では和泉型と鬼高型と呼ばれる二種類の高坏が流行しますが、古墳時代後期の後半には出土数が減る傾向にあります。



▲ 和泉型高坏

窪前遺跡 E-68住居址（大字七本木/5世紀中頃）

・和泉型高坏

古墳時代中期の伝統を受け継ぐ

和泉型高坏は、直線的に大きく外側に開く坏部とハの字形に開く脚部を持つのが特徴です。また全体的に丁寧な作りをしており、脚部内部が中空になっています。鬼高式土器の登場以前から作られていたものであり、その後は後述の「鬼高型高坏」と並行して用いられますが、6世紀中頃には廃れ、姿が見られなくなります。

・鬼高型高坏

鬼高式土器の坏から生まれた新たな高坏

模倣坏や内斜口縁坏をはじめとする坏に脚部を取り付けた形をしているのが特徴です。裾部はハの字状に広がります。模倣坏の登場とほぼ同時期の5世紀後半に姿を現し、7世紀前半頃まで流行します。特に6世紀半ばから後半には、大型化し長い脚部を持つものが流行します。これを鬼高式土器の研究者は「長脚化」と呼んでいます。



▲ 鬼高型高坏

窪前遺跡 T-41住居址（大字七本木/6世紀後半）

③甕 かめ

現在の鍋のように煮炊きに用いられた土器です。住居址内に作られた竈に差し込むことで火にかけ利用されました。鬼高式土器の甕は時代が下るにつれて、胴が長くなる傾向があります。これはこの時期に普及する竈（上里町周辺では5世紀中頃）に添えて使うのに効率がよいよう、徐々に形が変化したものと考えられています。そのため、これらの甕は「長胴甕」や「長甕」とも呼ばれます。また竈にかける際は、石や粘土で作った「支脚」と呼ばれる台を竈の中（火床）に置き安定させることで利用しました。

模倣坏と同様に時代によって形が明瞭に変化するため、遺跡の年代を知る上でヒントとなる土器です。



▲ 出現期の甕（左）と長胴化が進んだ頃の甕（右）

左は出現期のもので窪前遺跡 X-32住居址（大字七本木/5世紀後半）から出土しています。右は時代が進んだ新しいもので東猿見堂遺跡 Q-8住居址（大字五明/6世紀末頃）より出土しました。甕は新しいものほど胴が長く、口縁部は広くなります。

④甗 こしき

現在の蒸し器に当たる調理器具です。水を入れた甗の上に乗せ、甗と共に火にかけて利用しました。甗の底部には穴があけられており、内部に甗からの水蒸気が充満することで中の食材を加熱することができました。調理する主な食材は、米と考えられており、強飯（こわい：おこわ）を作っていたと考えられています。

・ 小型甗/大型甗

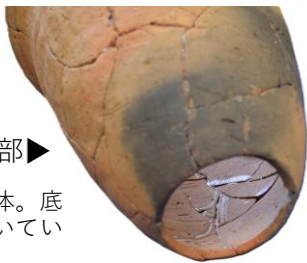
竈の普及と大型甗の登場

鬼高式土器の甗には、小型のものと大型のもの、大きく二つの甗が存在します。このうち大型甗は、古墳時代後期に普及するもので、この時期の集落遺跡から多く出土します。一方の小型甗は、それ以前から普及していることから、大型甗の出現は竈の登場により安定した火力の確保ができるようになったことを反映したものと考えられています。また、それまで一般的だった小型甗は、急速に数を減らしますが、その後も一定数が出土することから、祭祀のお供え等、特別な用途の食事を作ることにより用いられたと考えられています。いずれにせよ、大型甗は古墳時代後期を特徴づける土器といえます。



▲ 大型甗

臺第2 地点遺跡K-8 住居址出土（大字五明/6世紀中頃）



大型甗の底部▶

右上と同一個体。底部には穴が空いています。



▲ 小型甗

窪前遺跡Y-29住居址出土
（大字七本木/6世紀前半）



◀ 竈と甗・甗の使用例（作画：林）

水を入れた甗を竈にかけ、その上に甗を置き熱することで甗の中の食糧を蒸し料理にすることができました。

⑤壺/埴 つぼ/かん

壺と埴は、どちらも粘土で作られた壺を意味する漢字です。諸説あるようですが、上里町では口縁部の直径が小さく、貯蔵を目的とした土器を壺、中でも小型のものを小壺や小型壺と呼び、さらに小型のものを埴と呼んでいます。

この時期の壺は、大型のものは胴部が球状に作られ、口縁部に段を持つものが多いという特徴があります。小壺には、口縁部が長く立ち上がり、底部が丸底に作られたものが多いという特徴があります。



▲ 壺 (1) / 小壺 (2) / 埴 (3)

壺：窪前遺跡X-32住居址出土（大字七本木/5世紀後半）/小壺：西福寺西遺跡I-13住居址出土（大字堤/5世紀後半）/埴：窪前遺跡O-49住居址出土（大字七本木/5世紀後半）

コラム2 土器の部分のお名前

土器の各部には、それぞれ名前が付けられています。例えば、一般的な坏の場合では、上から口縁部（こうえんぶ）、体部の二つの部位から成り立っており、中でも模倣坏の場合には口縁部と体部の間にできた段差を稜と呼んでいます。また、甕の場合には、上から口縁部、胴部、底部と呼んでいます。同じタイプの土器であっても、時代によってこれらの部位の形に変化がみられるため、考古学者はこれらの部位の変化に注目して「編年」を考えています。



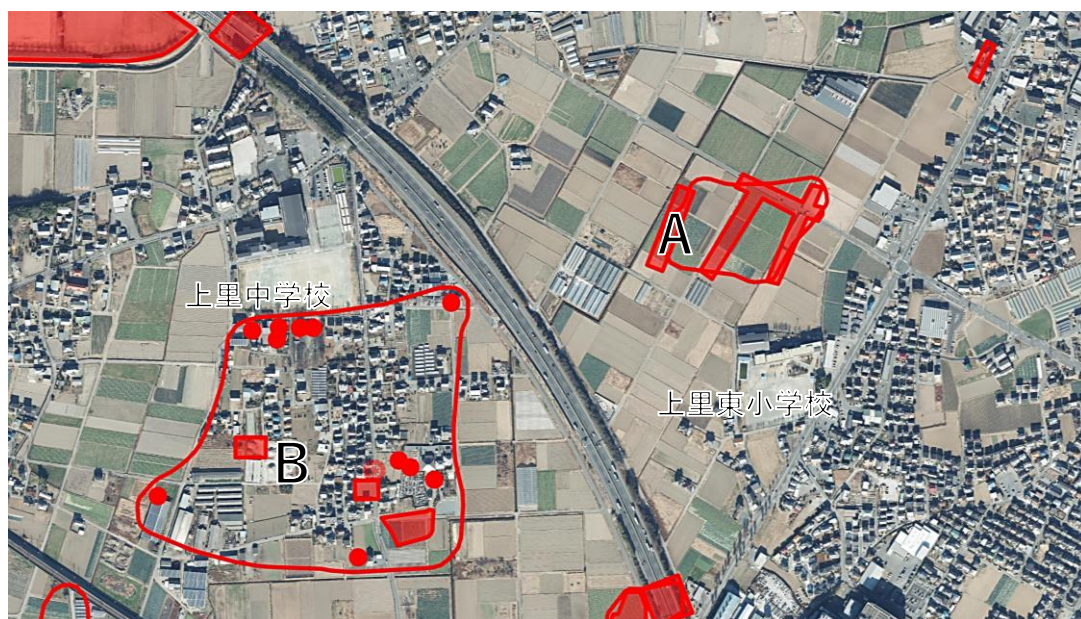
第2章 出現！！上里町の鬼高式土器

鬼高式土器の出現期（古墳時代後期前葉/5世紀後半～6世紀前半）

上里町内で鬼高式土器が出土する最も古い遺跡には、窪前遺跡と西福寺西遺跡B調査地点があります。それぞれ大字七本木と大字堤に所在しており、発掘調査によって、E-68住居址、X-32住居址、W-34住居址等の古墳時代中期から後期初頭にかけての住居址が確認されました。

これらの住居址から出土した土器は、大型で厚手の「模倣坏」やずんぐりとした「長胴甕」のほか「原初坏」や「内斜口縁坏」が出土しており、鬼高式土器のなかでも古い特徴を持つものが含まれていました。そのため、鬼高式土器が登場する古墳時代後期の初頭（5世紀の中頃）以前から継続して営まれた集落であることが判明しました。

また、この時期の集落遺跡は低湿地に面した台地上に営まれているのが特徴です。そのため、人々は近接する低湿地を開発し、水田等にして生活基盤としていたことが想像されます。町内で大規模な集落遺跡が営まれるようになるのはこの時期からであり、何らかの社会的な変動があったことが想定されます。



▲ 町内における鬼高式土器出現期の遺跡位置図（A：窪前遺跡 B：西福寺西遺跡）

(1) 窪前遺跡 くぼまえいせき

窪前遺跡は、上里町大字七本木字窪前に所在する集落遺跡です。農道の整備事業によって平成元年（1989）に発掘調査が行われ、古墳時代中期から後期に当たる5世紀前半～6世紀後半にかけての住居址が計61軒確認されました。このうち、明確に鬼高式土器が伴われる住居は28軒に上ります。

集落内の住居址は、加熱器具として炉（焚き火）が付属するものと竈が付属するものの二種類があり、共に出土した土器の年代から5世紀中頃以降に作られた住居址には竈が付属することが判明しました。そのため町内における竈の普及を知る上で重要な遺跡といえます。またE-68住居址からは「TK216型式」と呼ばれる、5世紀中頃に生産された須恵器の甕（はそう）が発見されました。町内で出土した須恵器の中では、最も古いものになり、須恵器の使用時期を伝える重要な資料になっています。また集落内でも比較的新しい時期に構築されたT-41住居址からは、6世紀後半に登場する「有段口縁坏」と呼ばれる模倣坏の一種が出土しています。

E-68住居址と出土土器群

E-68住居址は窪前遺跡で確認されている住居址の中でも比較的古い時期に作られた住居址の一つです。

坏や高坏、甕、甗等の土師器類がまとまって出土しています。このうち坏の多くは模倣坏よりも古い段階に出現する原初坏や内斜口縁坏に分類されるものでした。また、5世紀中頃に焼かれたと考えられるTK216型式の甗（須恵器の酒器の一種）が一緒に出土しています。そのため、同住居址とそこから出土した土師器群は、模倣坏が出現する直前の5世紀中頃に作られたものと考えられます。



▲ 窪前遺跡 調査地点風景

手前から二つ目の白線で囲まれた窪みがE-68住居址です。



▲ 窪前遺跡 E-68住居址出土土器

原初坏（1）、内斜口縁坏（2）、和泉型高坏（3）、甗（4）、埴（5）、甕（6）、須恵器甗（7）

X-32住居址と出土土器群

模倣坏の出現期に当たる住居址です。土師器の坏のほか、高坏、甕、甑等が出土しています。

出土した坏は、模倣坏、原初坏、内斜口縁坏でした。このうち模倣坏は、いずれも厚手で大きく、しっかりとした作りをしているのが特徴です。また甕がやや胴長になっていることから、これらの土器群及び住居址は先述のE-68住居址よりも新しい時期である5世紀後半頃に作られたものと考えられます。



▲ 窪前遺跡 X-32住居址



1



2



3



4



5



6



7



8

▲ 窪前遺跡 X-32住居址出土土器

模倣坏（1・4）、原初坏（2）、内斜口縁坏（3）、和泉型高坏（5）、鬼高型高坏（6）、甑（7）、甕（8）

このうち、4の坏はよく見ると内部が赤い顔料で彩色されていた。

W-34住居址と出土土器群

発掘調査によってW-34住居址からは土師器の坏や甕、甑等が出土しています。

出土した坏はいずれも模倣坏であり、原初坏や内斜口縁坏は伴われていませんでした。これら出土した模倣坏は、やや薄手で扁平な作りをしているのが特徴です。また、口縁部は直線的かつやや外側に広がるような作りをしています。甕も胴部が長くなった作りをしており、これらの特徴から、出土した土器と住居址は6世紀前半頃に作られたものと想定されます。



▲ 窪前遺跡W-34住居址出土土器

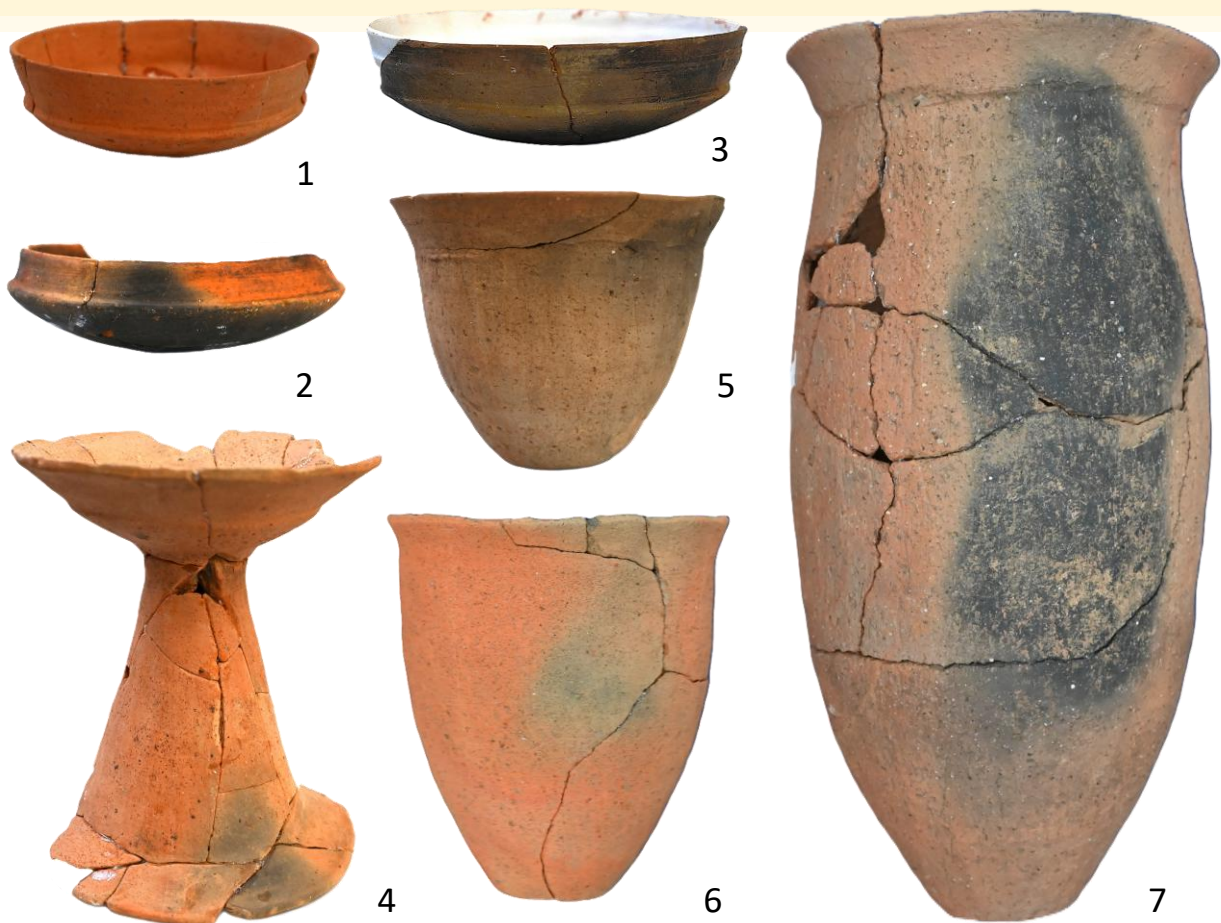
模倣坏（1～3）、小型甕（4）、甕（5）

甑は、写真のように甕と重ねて使用しました。

T-41住居址と出土土器群

窪前遺跡の中でも新しい時期の住居址の一つです。発掘調査によって土師器の坏、高坏、甑、甕等が出土しました。

出土した坏はごく一部を除きいずれも模倣坏であり、比較的扁平な作りをしています。また、口縁部に段を持つ「有段口縁坏」とよばれる模倣坏の一種も1点だけ出土しました。有段口縁坏は、6世紀後半に群馬県から埼玉県北にかけての地域で流行する坏です。また、一緒に出土した高坏は鬼高型高坏に分類されるもので、脚部が非常に高く発達した形をしていました。鬼高型高坏は6世紀半ば以降に脚部の長いものが流行する傾向にあるとされています。そのため、T-41住居址及び出土土器群の年代もそれ以降の6世紀後半に作られたものと考えられます。



▲ 窪前遺跡 T-41住居址出土土器

模倣坏（1・2）、有段口縁坏（3）、鬼高型高坏（4）、小型甑（5）、大型甑（6）、甕（7）



▲ 窪前遺跡 T-41住居址



▲ 窪前遺跡 T-41住居址 出土状況

(2)西福寺西遺跡B調査地点 さいふくじにししいせき

西福寺西遺跡は、上里町大字堤字西福寺に所在する集落遺跡です。同遺跡の範囲には熊野神社古墳をはじめとする小型の古墳が点在しており、古墳群としての性格も有しています。

このうち集落が発見されたB調査地は、耕地整備事業に伴い平成元年に発掘調査が行われています。調査では古墳時代中期から後期にあたる5世紀中頃から6世紀前半にかけての住居址が計9軒確認されました。

今回の展示で紹介するE-11住居址、I-13住居址を含む7軒の住居址から鬼高式土器が出土しています。窪前遺跡と同様、炉を持つ住居址と竈を持つ住居址の双方が確認されており、鬼高式土器の多くは竈を持つ住居址から出土しました。窪前遺跡と同時期に並行して営まれていた集落と考えられ、同様に竈の普及を知りうえて重要な遺跡です。



▲ 西福寺西遺跡B調査地点 I-13住居址

I-13住居址と出土土器群

調査によってI-13住居址からは、土師器の坏や高坏、甕、大型甌等が出土しています。

出土した坏には、大きくしっかりとした作りの模倣坏や原初坏が多く含まれていました。また甕も丸みを帯び、ずんぐりとした形をしています。これらの特徴から、出土した土器群と住居址は5世紀中頃に作られたものと想定されます。



▲ 西福寺西遺跡B調査地点 I-13住居址出土土器

模倣坏（1）、原初坏（2）、和泉型高坏（3）、甕（4）、大型甌（5）

E-11住居址と出土土器群

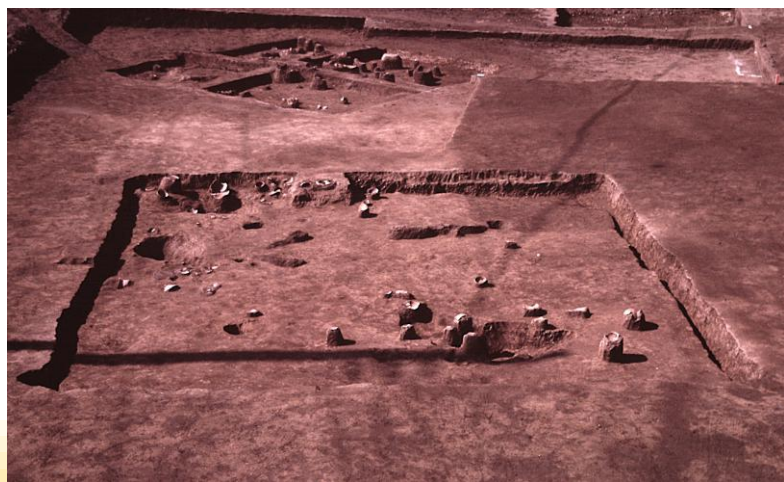
調査によって、E-11住居址からは土師器の坏や鬼高型高坏、甕、壺等が出土しています。

坏は大型でしっかりとした作りの模倣坏が出土したほか、原初坏も含まれていました。また甕も丸みを帯び、ずんぐりとした形をしていました。そのためこれらの特徴から、出土した土器と住居址は5世紀後半頃に作られたものと想定されます。



▲ 西福寺西遺跡B調査地点E-11住居址出土土器

模倣坏（1～4）、原初坏（5）、小壺（6）、鬼高型高坏（7）、甕（8）、大型壺（9）



◀ 西福寺西遺跡E-11住居址

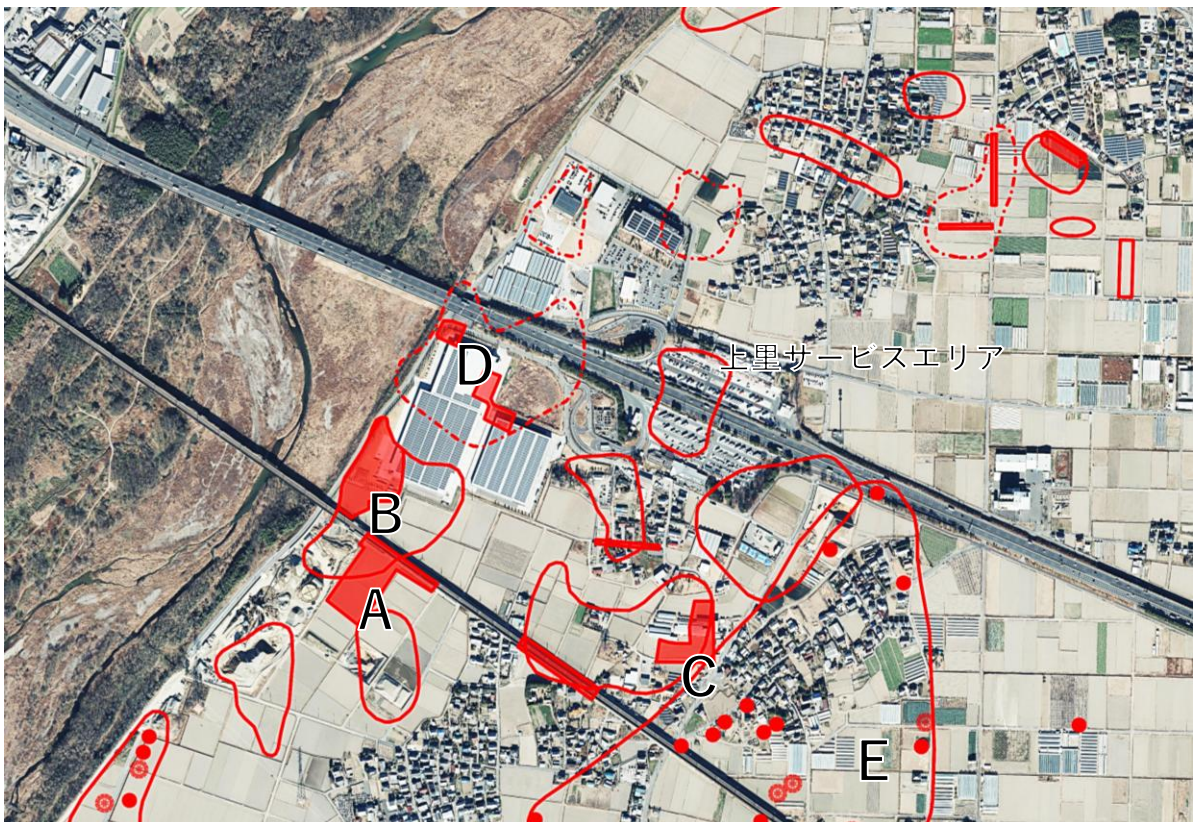
第3章 隆盛！！上里町の鬼高式土器

鬼高式土器の隆盛期（古墳時代後期中葉／6世紀半ば～6世紀後半）

窪前遺跡や西福寺西遺跡は、6世紀中頃には新たな住居を構築した形跡が認められなくなり、集落は消滅に向かいます。代わって集落が盛んに作られた地域が、町内の大字勅使河原から五明にかけての神流川流域でした。これらの集落遺跡は大字五明を中心に展開されることから「五明遺跡群」と通称され、これまでに8つの集落遺跡が確認されています。

これらの集落遺跡は神流川の運搬した土砂が堆積した「自然堤防」と呼ばれる地形の上に立地していました。自然堤防は高まりになっており、周辺よりも水はけが良く、水害の影響も受けにくいことから、この時期の人々は好んで集落を作り、居住域として利用していきました。また集落周辺には神流川が形成した低湿地が多く分布していたため、古墳時代の人々はこの低湿地を開発し、生活の基盤としていたことが考えられます。また、集落群に近接して帯刀古墳群等の同時代の古墳群が作られ、集落の墓域として機能していたことが想定されます。

発掘調査によって、これら遺跡は6世紀半ばから後半にかけてが集落としての全盛期であることが分かっており、7世紀以降は集落の規模が縮小していく傾向にあります。出土する土器についても「原初坏」や「内斜口縁坏」は数を減らし、扁平な形をした模倣坏が主体となります。また、甕も長胴のものが多くなります。いずれにせよ、町内で鬼高式土器の出土量が最も多いのは、この時期であり、町内における鬼高式土器の黄金時代でした。



▲ 五明遺跡群の分布図

A：東猿見堂遺跡 B：高野谷戸遺跡 C：北房ヶ谷戸遺跡 D：臺第Ⅱ地点遺跡

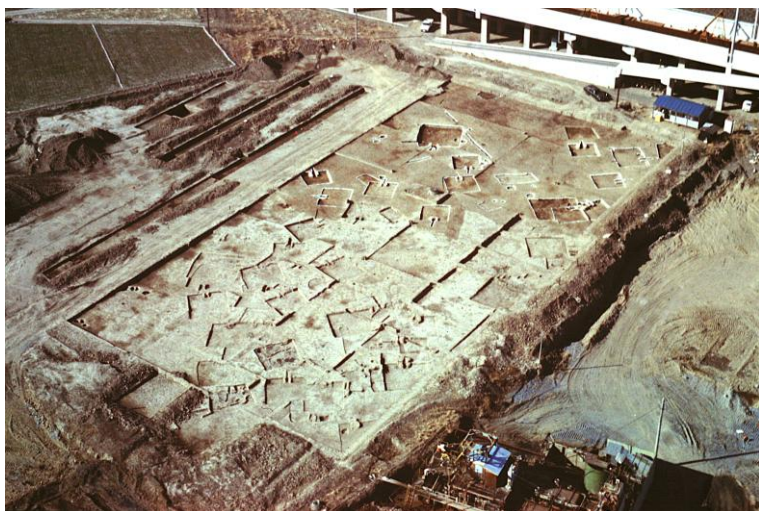
E：帯刀古墳群 ほか、線で囲まれた部分が古墳時代後期の集落遺跡です。

(I)東猿見堂遺跡 ひがしさるみどういせき

東猿見堂遺跡は、上里町大字五明字東猿見堂に所在する集落遺跡です。上越新幹線の高架をはさみ、南側に位置しています。昭和54年（1979）に砂利採取に伴い発掘調査が行われました。調査によって古墳時代後期から奈良時代にあたる、5世紀末から8世紀にかけての住居址49軒（時期不明のものも含む）及び祭祀の痕跡と思われる土器の集積遺構が発掘されました。

発掘された住居址のうち、5世紀末～7世紀前半に当たる古墳時代後期のものは、今回紹介するV-5住居址、P-19住居址等を含め36軒に上り、これら全ての遺構から鬼高式土器が出土しています。また窪前遺跡等で多く出土していた原初坏や内斜口縁坏等、古い型式の土器の出土は少ない傾向にあります。

出土した土器の年代から、確認された古墳時代後期の住居址の多くは6世紀中頃以降に作られたと考えられています。



▲ 東猿見堂遺跡 航空写真

V-5住居址と出土土器群

調査によって、V-5住居址からは土師器の坏や小壺、甕等が出土しています。

坏は原初坏も含みますが、出土したものの多くが大型の模倣坏でした。やや薄手に作られており、また一部には口縁部が大きく外側に反り返ったものが含まれます。甕は胴部が長く伸びていますが、まだ丸みを帯びてずんぐりとした形を残しています。これらの特徴から、出土した土器と住居址は6世紀の初め頃に作られたものと想定されます。



▲ 東猿見堂遺跡 V-5住居址出土土器 模倣坏（1～5）、小壺（6）、甕（7）

P-19住居址と出土土器群

調査によって、P-19住居址からは土師器の坏や甕等が出土しています。

出土した土師器の坏は全て模倣坏で、やや小ぶりで丸みを帯びた扁平な形をしていました。また一部は口縁部が大きく外側に反り返った形をしています。

甕は胴部が長く伸びた形をします。これらの特徴から、出土した土器とP-19住居址は6世紀前半頃に作られたものと想定されます。



▲ 東猿見堂遺跡 P-19住居址出土土器

模倣坏（1～3）、甕（4）

Q-8住居址と出土土器群

調査によって、Q-8住居址からは土師器の坏や甕、須恵器の坏等が出土しています。

出土した土師器の坏は全て模倣坏で、小ぶりで薄く、扁平な形をしていました。またこれら模倣坏のほとんどは口縁部が外側に反り返った形をしており、うち1点は有段口縁坏でした。

甕は胴部が非常に長く伸びた形をしており、胴部の径より口縁部の直径が広がっています。この特徴を持つ甕は7世紀段階のものに多く、これらの特徴から、出土した土器とQ-8住居址は7世紀の初めから前半頃に作られたものと想定されます。



▲ 東猿見堂遺跡 Q-8住居址出土土器

模倣坏（1）、有段口縁坏（2）、須恵器坏（3）、甕（4）

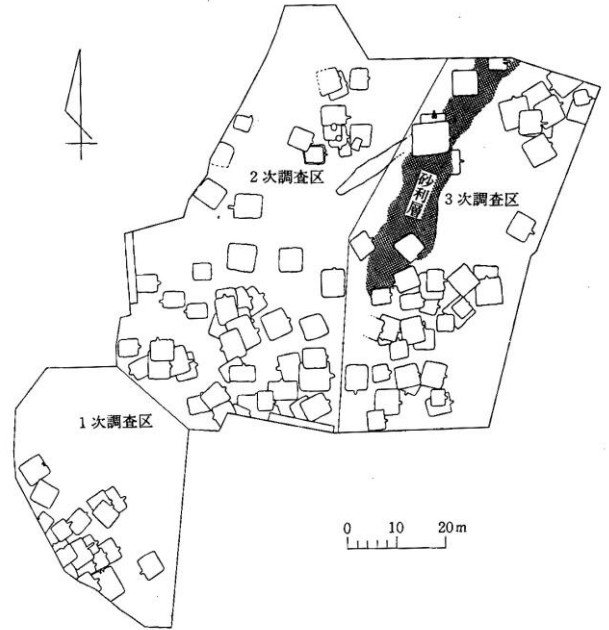
(2)高野谷戸遺跡 たかのやといせき

高野谷戸遺跡は、上里町大字五明字高野谷戸に所在する集落遺跡です。上越新幹線の高架をはさみ、北側に位置しています。南側の東猿見堂遺跡とは一つの大きな集落であったと考えられます。県教育委員会と町教育委員会によってこれまでに5回の発掘調査が実施されました。

これらの調査によって、古墳時代後期から平安時代に当たる5世紀末から10世紀にかけての住居址が174軒、ほかに古墳時代後期から奈良時代にかけての祭祀跡とみられる土器の集積遺構が複数箇所確認されました。

東猿見堂遺跡と同様に、高野谷戸遺跡も住居址の多くが鬼高式土器を伴うもので、やはり6世紀中頃から後半にかけて盛んに営まれた集落であると考えられています。

ここでは、町教育委員会が昭和末から平成初頭に実施した調査による出土品を中心に紹介します。



▲ 高野谷戸遺跡第1次～3次調査 全体図

R-24住居址と出土土器群

調査によって、R-24住居址からは土師器の坏や甗等が出土しています。

出土した土師器の坏は全て模倣坏で、やや小ぶりな丸みを帯びた扁平な形をしていました。また一部は口縁部が大きく外側に反り返った形をしています。

これらの特徴から、出土した土器と住居址は6世紀前半頃に作られたものと想定されます。



▲ 高野谷戸遺跡 R-24住居址



▲ 高野谷戸遺跡 R-24住居址出土土器

模倣坏（1～3）、大型甗（4）、小型甗（5）

コラム3 有段口縁坏の地域性

今回展示した鬼高式土器の中に「有段口縁坏」と呼ばれる坏がいくつか含まれています。高野谷戸遺跡ではJ-32住居址やE-21住居址で出土しました。この坏は、模倣坏の一種ですが、口縁部に数本の横線が彫られているのが特徴です。6世紀後半以降に群馬県から児玉郡、大里郡周辺で流行した形態でした。

この時期の県内では「有段口縁坏」のほか、東松山市や坂戸市等を含む比企郡周辺で流通した「比企型坏」等が登場し、当時の地域のネットワークの成立や古代のコミュニティの様子が分かる資料として注目されます。



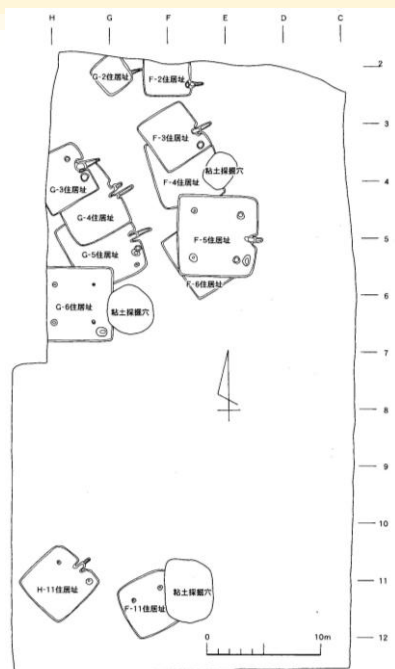
▲ 有段口縁坏

上段：高野谷戸遺跡第3次調査 J-32住居址出土

下段：高野谷戸遺跡第3次調査 E-21住居址出土

共に6世紀後半

(3)北房ヶ谷戸遺跡 きたふさがやといせき



北房ヶ谷戸遺跡は、上里町大字五明字北房ヶ谷戸に所在する集落遺跡です。上里サービスエリアの南側に位置します。昭和58年（1983）に発掘調査が実施され、古墳時代後期から奈良時代にかけての住居址が計12軒（時期不明の住居址も含む）確認されました。このうち、今回紹介するG-5住居址やE-6住居址を含む5軒の住居址から、古墳時代後期である6世紀中頃から7世紀初頭にかけての鬼高式土器が出土しています。

◀ 北房ヶ谷戸遺跡 全体図



▲ 北房ヶ谷戸遺跡 G-5 住居址

G-5 住居址と出土土器群

調査によって、G-5住居址からは土師器の坏や甕等が出土しています。

出土した土師器の坏は模倣坏と有段口縁坏で、やや小ぶりで丸みを帯びた扁平な形をしていました。また甕は胴部が長く伸びた形をしています。

これらの特徴から、出土した土器とG-5住居址は6世紀後半頃に作られたものと想定されます。



1



2



3

▲ 北房ヶ谷戸遺跡 G-5 住居址出土土器

有段口縁坏（1）、模倣坏（2）、甕（3）

E-6 住居址と出土土器群

調査によって、E-6 住居址からは土師器の坏や壺、大型甗、甕等が出土しています。

出土した土師器の坏は全て模倣坏で、やや小ぶりで丸みを帯び、非常に扁平な形をしていました。また一部は大きく外側に反り返った形をしています。

これらの特徴から、出土した土器と住居址は6世紀末頃に作られたものと想定されます。



▲ 北房ヶ谷戸遺跡 E-6 住居址 出土状況



▲ 北房ヶ谷戸遺跡 E-6 住居址出土土器

模倣坏（1）、壺（2）、甕（3）、大型甗（4）

(4) 臺第2地点遺跡 だいだい2ちてんいせき

臺第2地点遺跡は、上里町大字五明字臺に所在する集落遺跡です。遺跡の位置は現在の関越道上里スマートインターチェンジにあたります。当該インターチェンジの設置に伴い、町教育委員会によって平成22年（2010）に発掘調査が実施され、古墳時代後期から奈良時代（6世紀前半から8世紀初頭）にかけての住居址が計16軒確認されました。

このうち、古墳時代後期にあたる住居址は13軒であり、いずれも鬼高式土器の模倣坏や長胴甕を伴うものでした。そのため、6世紀中頃から7世紀中頃にかけて盛んに営まれた集落と考えられています。また、同遺跡の南東側に近接する地点には昭和52年（1977）に県教育委員会が発掘調査を行った第1調査地点（臺遺跡）があり、こちらでも5世紀末から8世紀前半にかけての住居址が確認されました。中でも鬼高式土器を伴う住居址は両遺跡合わせて78軒中、59軒に上ります。東猿見堂遺跡等、ほかの五明遺跡群の集落と同様の傾向にあることが分かります。



▲ 臺第2地点遺跡 発掘調査時航空写真

K-8住居址と出土土器群

調査によって、K-8住居址からは土師器の坏や小型壺、甕等が出土しています。

出土した土師器の坏は全て模倣坏で、やや小ぶりで扁平な形をしていました。一部に須恵器坏の身を模倣したもの（4）も見ついています。また、出土した甕も胴の長い作りをしていました。

これらの特徴から、出土した土器と住居址は6世紀末頃に作られたものと想定されます。



▲ 臺第2地点遺跡 K-8住居址 出土状況



▲ 臺第2地点遺跡K-8住居址出土土器

模倣坏（1～3）、身の模倣坏（4）、小型壺（5・6）、甕（7）

H-12住居址と出土土器群

調査によって、H-12住居址からは土師器の坏や甗、甕等が出土しています。

出土した土師器の坏は模倣坏と有段口縁坏で、やや小ぶりで扁平な形をしています。一緒に出土した甗はK-8住居址から出土したものより胴が長く、口縁部も大きな作りになっていました。

これらの特徴から、出土した土器と住居址は6世紀後半に作られたものと想定されます。



▲ 臺第2地点遺跡H-12住居址



▲ 臺第2地点遺跡H-12住居址出土土器

模倣坏（1）、有段口縁坏（2）、甗（3）、甕（4）

コラム4 お祝いで作る赤飯はなぜ赤いのか

小豆の入った赤飯のことを「オコワ」といいますが、これは甑やせいろで蒸して調理した米である「強飯（こわいい）」が転訛した言葉です。今ではお祭りや結婚祝い、入学祝等の祝い事で作られることが多いですね。これは古代に栽培されていた米が赤米（古代米）であり、甑で蒸して調理していたことに由来するとされています。つまり白米が普及した後も冠婚葬祭などの伝統的な行事では赤い蒸し米が作られ続けたと考えられるのです。そのため、白米が普及した現在もわざわざ小豆と一緒に蒸すことで赤米を再現していると考えられます。

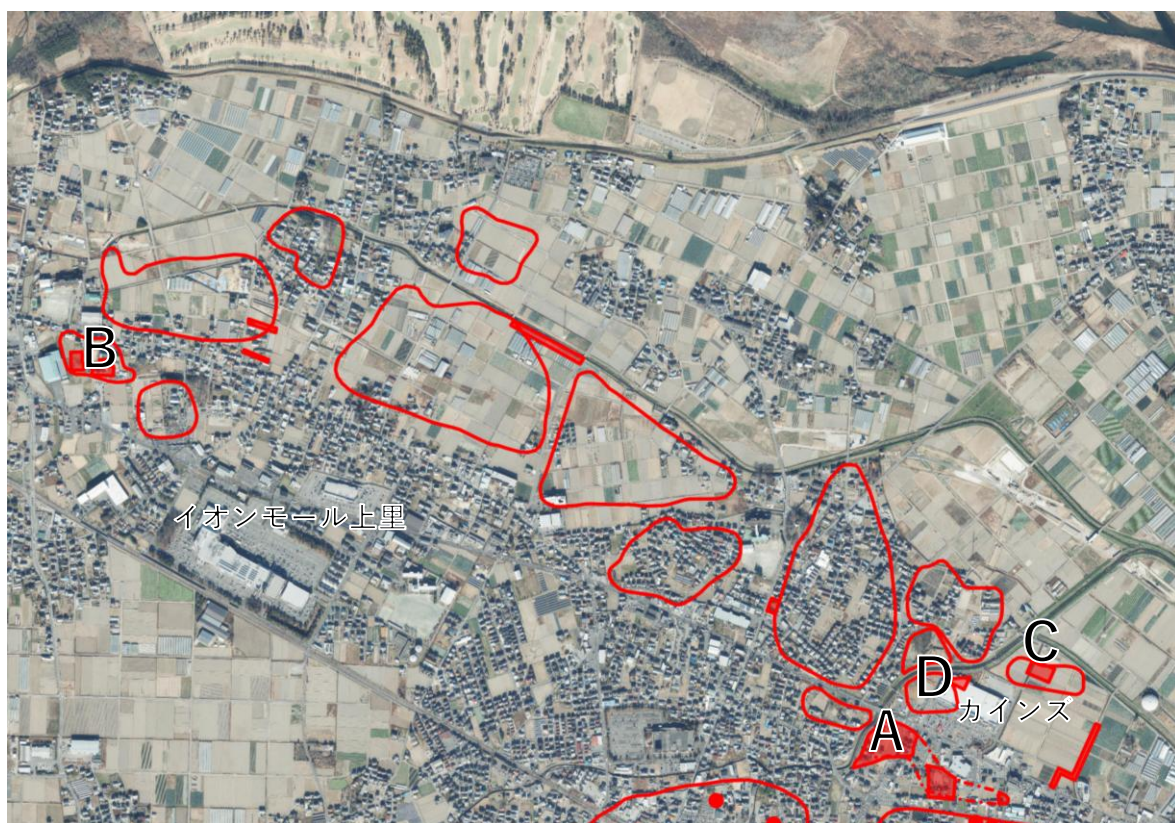
第4章 町内における鬼高式土器の終焉

衰退・終焉期の鬼高式土器（古墳時代終末期/7世紀初頭～7世紀中頃）

「五明遺跡群」は7世紀以降に衰退を迎えますが、代わって町内で集落の造営が活発になるのは、大字金久保、神保原町を中心とする烏川の周辺です。この地域には烏川の浸食によって生まれた低湿地である「烏川低地」とそれを望む段丘が作られており、古墳時代の集落はこの段丘上の平たん部に作られます。

上里町教育委員会では北稲塚遺跡や田通遺跡をはじめ周辺で7回の発掘調査を実施しており、これまでに古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて営まれた集落の遺跡を確認しています。この時期は古墳時代から奈良時代に移りゆく画期にあたり、古墳時代終末期とも呼ばれる時代になります。この時期の土器類では、甕は胴が非常に長くなり、口縁部の直径も大きくなった寸胴形のものが流行します。また模倣坏は小型で薄手のものが非常に多くなります。さらに7世紀の半ばには「北武蔵型坏」と呼ばれる新たな形態の坏が登場しました。

「北武蔵型坏」は飛鳥や平城京等の畿内地方で使われていた「畿内系坏」を模倣して作られたものとされ、埼玉県周辺で飛鳥・奈良時代（7世紀から8世紀）にかけて流行しました。北武蔵型坏が登場して間もない頃は、小型化した模倣坏と混在して出土します。



▲ 鬼高式土器の終焉期（古墳時代終末期）における町内遺跡の分布図

A：田通遺跡 B：寺西Ⅱ遺跡 C：北稲塚遺跡 D：北稲塚第Ⅱ地点遺跡

(1)田通遺跡 たどおしいせき

上里町大字神保原町字北稲塚及び南稲塚に所在する集落遺跡です。御陣場川の東側の岸辺に位置します。平成6年(1994)に区画整備事業に伴い発掘調査が行われ、古墳時代終末期から平安時代に当たる7世紀初頭から9世紀にかけての住居址が30軒確認されました。

このうち、鬼高式土器を伴うものは3軒あり、その1軒であるP-21住居址からは鬼高式土器のみが出土しています。そのため6世紀末から7世紀初頭に作られた住居址であることが判明しました。また残る2軒は鬼高式土器の模倣坏と北武蔵型坏が混成して出土しており、7世紀半ばから後半にかけて構築された住居址であると想定されました。



▲ 田通遺跡 発掘調査時航空写真

P-21住居址と出土土器群

調査によって、P-21住居址からは土師器の坏や鉢、甕等が出土しています。

出土した土師器の坏は模倣坏と有段口縁坏でした。これらは小ぶりで扁平な形をしており、厚さも非常に薄い作りになっています。また、一緒に出土した甕は胴が長く、口縁部が大きく広がります。

これらの特徴から、出土した土器と住居址は6世紀末～7世紀初頭に作られたものと想定されます。



◀ 田通遺跡 P-21 住居址

竈址より土師器の坏が対称に出土している様子が分かる。



1



2



3



4

田通遺跡 P-21住居址出土土器▶

有段口縁坏(1)、模倣坏(2)、鉢(3)、甕(4)

(2)寺西Ⅱ遺跡 てらにしⅡいせき

寺西遺跡は、上里町大字金久保字寺西に所在する集落遺跡です。町立賀美小学校の南東側に位置し、烏川が形成した低湿地を望む段丘上に所在します。これまでに町教育委員会によって2回の発掘調査（寺西Ⅰ遺跡・寺西Ⅱ遺跡）が行われており、古墳時代終末期から平安時代にかけての住居址が計23軒確認されています。

鬼高式土器が出土したのはこのうち2回目に行われた寺西Ⅱ遺跡の調査でした。調査で確認された15軒の住居址のうち、6軒から鬼高式土器の模倣坏が出土しています。これらの模倣坏は小型であり、E-10住居址をはじめとする4軒で北武蔵型坏とともに出土することが分かりました。そのため、寺西Ⅱ遺跡で出土する鬼高式土器も他の遺跡と同様に7世紀の半ばから後半にかけてのものに該当します。鬼高式土器から、北武蔵型坏をはじめとする奈良時代の土器への移り変わりがよく分かります。



▲ 寺西Ⅱ遺跡 発掘調査時航空写真

E-10住居址と出土土器群

調査によって、E-10住居址からは土師器の坏や鬼高型高坏、埴、甕等が出土しています。

出土した土師器の坏のうち多くは北武蔵型坏であり、模倣坏の出土は1点だけに留まります。出土した模倣坏は大変小ぶりで扁平な形をしていました。また、一緒に出土した甕は口縁が大きく寸胴状の作りをしていました。

これらの土器の特徴や北武蔵型坏が多く出土する点から、出土した土器と住居址は7世紀中頃に作られたものと想定されます。



▲ 寺西Ⅱ遺跡 E-10住居址



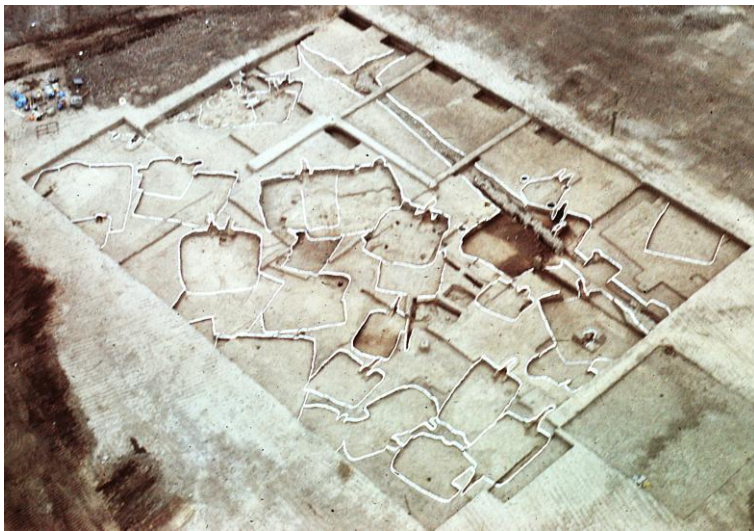
▲ 寺西Ⅱ遺跡 E-10住居址出土土器

模倣坏（1）、北武蔵型坏（2）、埴（3）、鬼高型高坏（4）、甕（5）

(3)北稲塚遺跡 きたいなづかいせき

上里町大字神保原町字北稲塚に所在する集落遺跡です。現在のカインズスーパーセンター上里本庄店の北東側に所在します。御陣場川と元小山川の水源地のほとりにあり、河川を水源に農業や漁業を生業としていたと考えられる遺跡です。

耕地整理事業に伴い町教育委員会では昭和55年（1980）に発掘調査を実施しており、古墳時代終末期から平安時代にあたる、7世紀前半から9世紀前半にかけての住居址が計39軒確認されています。このうち、鬼高式土器が出土する住居址は15軒でした。模倣坏は五明遺跡群から出土したものよりも小型のものが多いのが特徴です。そのため模倣坏の中でも比較的新しい7世紀前半から中頃のものと想定されています。



▲ 北稲塚遺跡 発掘調査時航空写真

L-12b 住居址と出土土器群

調査によって、L-12b 住居址からは土師器の坏や鉢、鬼高型高坏、甕等が出土しています。

出土した土師器の坏は模倣坏と有段口縁坏でした。これらは小ぶりで扁平な形をしており、厚さも非常に薄い作りになっていました。また、一緒に出土した甕は胴が長く、口縁部が大きく広がる寸胴形をしています。

これらの特徴から、出土した土器と住居址は6世紀末～7世紀初頭に作られたものと想定されます。

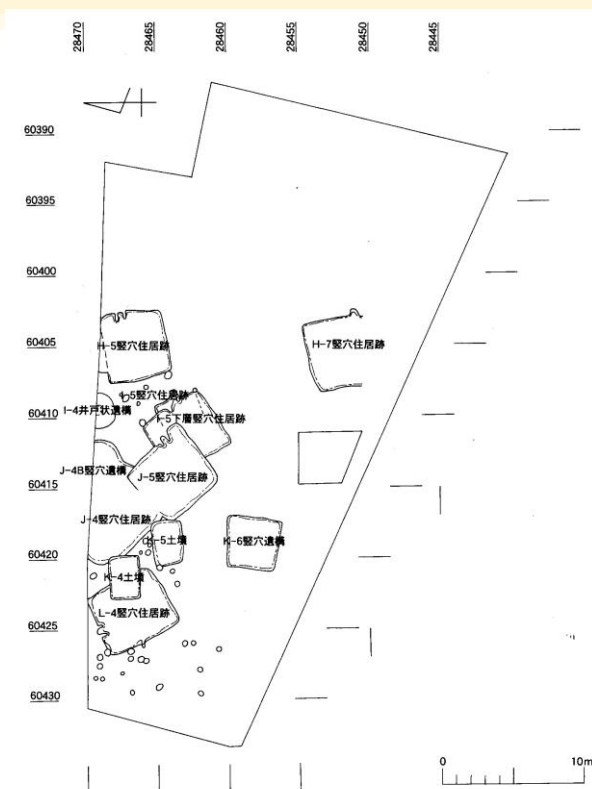


▲ 北稲塚遺跡 L-12b 住居址出土土器

模倣坏（1～3）、有段口縁坏（4）、鉢（5・6）、鬼高型高坏（7）、甕（8）

(4)北稲塚第Ⅱ地点遺跡 きたいなづかだいⅡちてんいせき

上里町大字神保原町字北稲塚に所在する集落遺跡です。現在のカインズスーパーセンター上里本庄店の西側に所在します。御陣場川と元小山川のほとりにあり、河川を水源に農業や漁業を生業としていたと考えられる遺跡です。耕地整理事業に伴い町教育委員会では昭和55年に発掘調査を実施しており、古墳時代終末期から平安時代に当たる、7世紀前半から9世紀前半にかけての竪穴住居が計39軒確認されています。このうち、鬼高式土器が出土する住居址はH-5住居址を含め15軒でした。これらのうち、模倣坏は五明遺跡群から出土するものよりも小型のものが多く、模倣坏の中でも新しい7世紀前半から中頃のものとして想定されます。



▲ 北稲塚第Ⅱ地点遺跡 全体図

H-5 住居址と出土土器群

調査によって、H-5 住居址からは土師器の坏や鉢、埴、台付甕、大小甑等が出土しています。出土した土師器の坏の中には模倣坏と北武蔵型坏が混在していました。

このうち模倣坏は小ぶりて扁平な形をしており、厚さも非常に薄い作りをしています。また、台付甕は煮炊きに用いられたものと考えられますが、これ以降の奈良時代にかけての遺跡から多く出土するものです。

これらの特徴から、出土した土器と住居址は7世紀中頃の古墳時代終末期の終わり頃であり、遺跡が古墳時代から飛鳥・奈良時代に移り変わる画期に造られたことを物語っています。



▲ 北稲塚第Ⅱ地点遺跡 H-5 住居址

住居址全体より土器等の遺物が出土している。



▲ 北稻塚第Ⅱ地点遺跡H-5 住居址出土土器

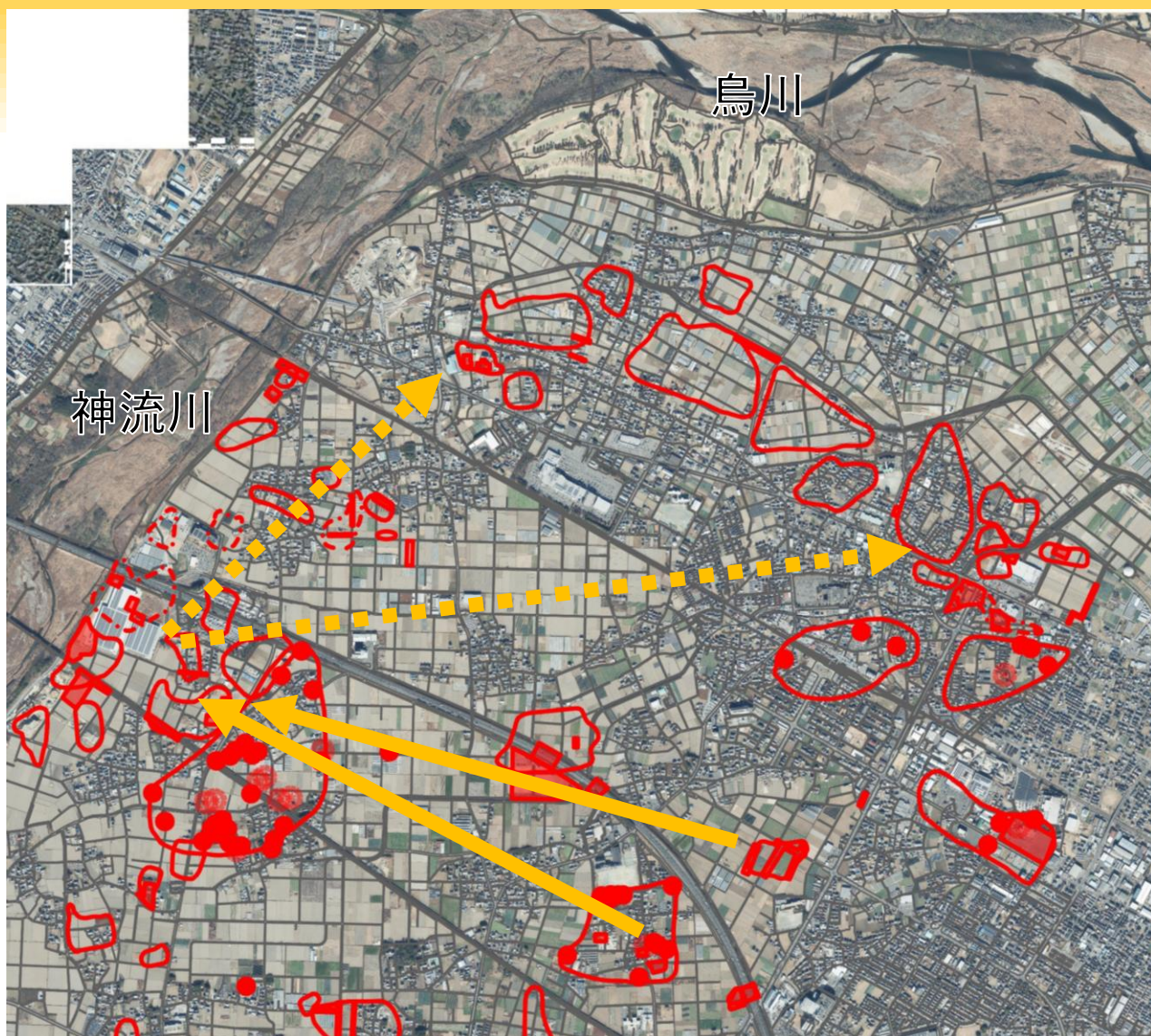
北武蔵型坏（1）、模倣坏（2・3）、埴（4）、台付甕（5）、小型甕（6）、大型甕（7）

終わりに 鬼高式土器と古墳時代の終焉

ここまで上里町の鬼高式土器が出土した集落遺跡を紹介してきました。町内では5世紀前半頃に窪川周辺に集落遺跡が出現しました。これらの集落では5世紀半ば頃から竈や須恵器等と共に鬼高式土器が使われ始め、間もなく集落としての最盛期を迎えます。しかし集落の営みは次第に衰え、6世紀後半には廃絶を迎えました。代わって町内で集落が盛んに営まれる地域は神流川沿いに移動します。これらの集落の最盛期は6世紀の半ばから後半にかけてであり、ここも7世紀に入ると次第に過疎化していきました。さらに7世紀前半の古墳時代終末期になると、人々の暮らしの中心は烏川のほとりの台地上に移り、北稻塚遺跡や寺西Ⅱ遺跡等が営まれるようになります。

さて、ここまで紹介した全ての遺跡から米を調理するための大型甕が出土しています。そのためこの時期の人々の暮らしは稲作をはじめとする農業によって成り立っていたと考えられ、人々は移動先の河川を水源として、村の周辺を水田として開発しながら、生活の基盤としていたことが想像できます。もちろん、水田の開発は一人ではできず、地方豪族と呼ばれる地域のリーダー達が中心となって集団で開発に挑んだことでしょう。この間、約200年になりますが、形を少しずつ変えながら鬼高式土器は人々の間で使われ続けました。しかし、長く使われた鬼高式土器も次第に「北武蔵型坏」のような新しい土器に置き換わっていきました。

8世紀初頭には古墳時代をとおり作られ続けていた模倣坏も姿を消し、坏は北武蔵型坏に完全に置き換わります。ちょうどこの頃、地域の豪族達によって独自に行われていた地域支配の時代が終わり、大和朝廷による中央集権的な支配体制に移行しました。彼らによって地方各地で作られていた古墳の造営が終わったのもこの時期でした。鬼高式土器の消滅はそういった古墳時代の終焉を象徴する出来事の一つといえるかもしれません。



▲ 鬼高式土器使用時期（5世紀後半～7世紀半ばにかけての町内遺跡の変遷）

← 6世紀前半頃の動き ← 7世紀初頭頃の動き

主要参考文献

論文・論考等

柿沼幹夫「甗形土器に関する一考察 南関東地方の出土例を中心として」『埼玉考古』第15号 埼玉考古学会 1976年

末木啓介「埼玉県におけるカマド導入期の様相 カマド、大型甗、坏の形態を中心として」（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994年

立石盛詞「土器について」『後張』本文編Ⅱ （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983年

利根川章彦「古墳時代集落構成の一考察 児玉地方の5～8世紀の集落群の動態と土師器の変遷を中心として」『土曜考古』第5号 土曜考古学研究会 1982年

中村倉司「関東地方における竈・大形甗・須恵器出現時期の地域差」『研究紀要』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989年

田中広明「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会 1995年

田中広明「武蔵地域の鬼高式土器 古墳出土の食膳具の示す地域圏」『月刊考古学ジャーナル』342 1992年

山本良太「北武蔵地域における内斜口縁坏の編年的位置づけ」『研究紀要』第30号（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2016年

滝澤 誠「消えゆく甑」井上尚明ほか編『飛鳥時代の東国』高志書院 2020年

新納 泉「古墳時代の社会統合」鈴木靖民編『倭国と東アジア』吉川弘文館 2002年

外尾常人「古代上里町における人々の動き その1」『研究紀要』第9号 上里町立郷土資料館 2011年

外尾常人「古代上里町における人々の動き その2」『研究紀要』第10号 上里町立郷土資料館 2012年

林 道義「五明廃寺の葡萄唐草」『研究紀要』第17号 上里町立郷土資料館 2019年
発掘調査報告書等

金井塚良一ほか『原・清水南』上里町教育委員会 1978年

駒宮史郎『若宮台』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983年

埼玉県遺跡調査会編『臺遺跡』埼玉県遺跡調査会 1980年

田中広明ほか『中堀遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997年

外尾常人『金久保内出遺跡発掘調査報告書』上里町教育委員会 1987年

外尾常人『寺西Ⅱ遺跡』上里町教育委員会 2003年

外尾常人『北稻塚第Ⅱ地点遺跡』上里町教育委員会 2007年

外尾常人『臺第2地点遺跡』上里町教育委員会 2013年

林 道義『中原館址・寺西Ⅰ遺跡発掘調査報告書』上里町教育委員会 2019年

林 道義『高野谷戸遺跡第3次発掘調査報告書』上里町教育委員会 2025年

丸山 修『田通遺跡』上里町教育委員会 1997年

丸山 修『北稻塚遺跡発掘調査報告書』上里町教育委員会 2018年

丸山 修『町内遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』上里町教育委員会 2018年

丸山 修『窪前遺跡発掘調査報告書』上里町教育委員会 2020年

丸山 修『東猿見堂遺跡発掘調査報告書』上里町教育委員会 2021年

丸山 修『北房ヶ谷戸遺跡発掘調査報告書』上里町教育委員会 2021年

丸山 修『高野谷戸遺跡第1次発掘調査報告書』上里町教育委員会 2023年

丸山 修『高野谷戸遺跡第2次発掘調査報告書』上里町教育委員会 2024年

書籍等

上里町史編集専門委員会編『上里町史』資料編 上里町 1992年

田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年

大川 清ほか『日本土器事典』雄山閣 1996年

【展示資料目録】

第1章 「鬼高」とは何か 鬼高式土器について

番号	資料名称	出土遺跡	出土地	時期（時代）
1	須恵器 坏（蓋）	高野谷戸遺跡第2次	大字五明	6世紀前半
2	須恵器 坏（身）	下郷古墳群	大字長浜	6世紀前半
3	模倣坏	窪前遺跡X-32住居址	大字七本木	5世紀後半
4	模倣坏	東猿見堂遺跡V-5住居址	大字五明	6世紀初頭
5	模倣坏	窪前遺跡W-34住居址	大字七本木	6世紀前半
6	原初坏	窪前遺跡X-32住居址	大字七本木	5世紀後半
7	原初坏	窪前遺跡X-32住居址	大字七本木	5世紀後半
8	内斜口縁坏	西福寺西遺跡B調査地点J-8住居址	大字堤	5世紀後半
9	和泉型高坏	窪前遺跡E-68住居址	大字七本木	5世紀中頃
10	和泉型高坏	窪前遺跡O-49住居址	大字七本木	6世紀後半
11	鬼高型高坏	窪前遺跡T-41住居址	大字七本木	6世紀後半
12	壺	窪前遺跡X-32住居址	大字七本木	5世紀後半
13	小壺/小型壺	西福寺西遺跡B調査地点I-13住居址	大字堤	5世紀後半
14	埴	窪前遺跡O-49住居址	大字七本木	5世紀後半
15	甕	窪前遺跡X-32住居址	大字七本木	5世紀後半
16	甕	東猿見堂遺跡Q-8住居址	大字五明	6世紀末頃
17	大型甕	臺第2地点遺跡K-8住居址	大字五明	6世紀中頃
18	小型甕	窪前遺跡Y-29住居址	大字七本木	6世紀前半

第2章 出現！！上里町の鬼高式土器

番号	資料名称	出土遺跡	出土地	時期（時代）
19	埴	窪前遺跡E-68住居址	大字七本木	5世紀中頃
20	原初坏	窪前遺跡E-68住居址	大字七本木	5世紀中頃
21	原初坏	窪前遺跡E-68住居址	大字七本木	5世紀中頃
22	内斜口縁坏	窪前遺跡E-68住居址	大字七本木	5世紀中頃
23	和泉型高坏	窪前遺跡E-68住居址	大字七本木	5世紀中頃
24	甕	窪前遺跡E-68住居址	大字七本木	5世紀中頃
25	大型甕	窪前遺跡E-68住居址	大字七本木	5世紀中頃
26	甕	窪前遺跡E-68住居址	大字七本木	5世紀中頃
27	模倣坏	窪前遺跡X-32住居址	大字七本木	5世紀後半
28	模倣坏	窪前遺跡X-32住居址	大字七本木	5世紀後半
29	模倣坏	窪前遺跡X-32住居址	大字七本木	5世紀後半
30	原初坏	窪前遺跡X-32住居址	大字七本木	5世紀後半
31	内斜口縁坏	窪前遺跡X-32住居址	大字七本木	5世紀後半
32	和泉型高坏	窪前遺跡X-32住居址	大字七本木	5世紀後半
33	鬼高型高坏	窪前遺跡X-32住居址	大字七本木	5世紀後半
34	甕	窪前遺跡X-32住居址	大字七本木	5世紀後半
35	大型甕	窪前遺跡X-32住居址	大字七本木	5世紀後半
36	模倣坏	窪前遺跡W-34住居址	大字七本木	6世紀前半
37	模倣坏	窪前遺跡W-34住居址	大字七本木	6世紀前半
38	模倣坏	窪前遺跡W-34住居址	大字七本木	6世紀前半
39	模倣坏	窪前遺跡W-34住居址	大字七本木	6世紀前半
40	模倣坏	窪前遺跡W-34住居址	大字七本木	6世紀前半
41	甕	窪前遺跡W-34住居址	大字七本木	6世紀前半
42	小型甕	窪前遺跡W-34住居址	大字七本木	6世紀前半
43	模倣坏	窪前遺跡T-41住居址	大字七本木	6世紀後半
44	模倣坏	窪前遺跡T-41住居址	大字七本木	6世紀後半
45	有段口縁坏	窪前遺跡T-41住居址	大字七本木	6世紀後半
46	鬼高型高坏	窪前遺跡T-41住居址	大字七本木	6世紀後半
47	鬼高型高坏	窪前遺跡T-41住居址	大字七本木	6世紀後半
48	甕	窪前遺跡T-41住居址	大字七本木	6世紀後半

49	小型甗	窪前遺跡 T -41住居址	大字七本木	6 世紀後半
50	大型甗	窪前遺跡 T -41住居址	大字七本木	6 世紀後半
51	模倣坏	西福寺西遺跡 B 調査地点 I -13住居址	大字堤	5 世紀中頃
52	原初坏	西福寺西遺跡 B 調査地点 I -13住居址	大字堤	5 世紀中頃
53	原初坏	西福寺西遺跡 B 調査地点 I -13住居址	大字堤	5 世紀中頃
54	原初坏	西福寺西遺跡 B 調査地点 I -13住居址	大字堤	5 世紀中頃
55	大型甗	西福寺西遺跡 B 調査地点 I -13住居址	大字堤	5 世紀中頃
56	甗	西福寺西遺跡 B 調査地点 I -13住居址	大字堤	5 世紀中頃
57	和泉型高坏	西福寺西遺跡 B 調査地点 I -13住居址	大字堤	5 世紀中頃
58	模倣坏	西福寺西遺跡 B 調査地点 E -11住居址	大字堤	5 世紀後半
59	模倣坏	西福寺西遺跡 B 調査地点 E -11住居址	大字堤	5 世紀後半
60	模倣坏	西福寺西遺跡 B 調査地点 E -11住居址	大字堤	5 世紀後半
61	模倣坏	西福寺西遺跡 B 調査地点 E -11住居址	大字堤	5 世紀後半
62	原初坏	西福寺西遺跡 B 調査地点 E -11住居址	大字堤	5 世紀後半
63	鬼高型高坏	西福寺西遺跡 B 調査地点 E -11住居址	大字堤	5 世紀後半
64	小型壺/小壺	西福寺西遺跡 B 調査地点 E -11住居址	大字堤	5 世紀後半
65	壺	西福寺西遺跡 B 調査地点 E -11住居址	大字堤	5 世紀後半
66	甗	西福寺西遺跡 B 調査地点 E -11住居址	大字堤	5 世紀後半

第3章 隆盛！！上里町の鬼高式土器

番号	資料名称	出土遺跡	出土地	時期（時代）
67	模倣坏	東猿見堂遺跡 V - 5 住居址	大字五明	6 世紀初頭
68	模倣坏	東猿見堂遺跡 V - 5 住居址	大字五明	6 世紀初頭
69	模倣坏	東猿見堂遺跡 V - 5 住居址	大字五明	6 世紀初頭
70	模倣坏	東猿見堂遺跡 V - 5 住居址	大字五明	6 世紀初頭
71	模倣坏	東猿見堂遺跡 V - 5 住居址	大字五明	6 世紀初頭
72	小型壺/小壺	東猿見堂遺跡 V - 5 住居址	大字五明	6 世紀初頭
73	甗	東猿見堂遺跡 V - 5 住居址	大字五明	6 世紀初頭
74	模倣坏	東猿見堂遺跡 P -19住居址	大字五明	6 世紀前半
75	模倣坏	東猿見堂遺跡 P -19住居址	大字五明	6 世紀前半
76	模倣坏	東猿見堂遺跡 P -19住居址	大字五明	6 世紀前半
77	甗	東猿見堂遺跡 P -19住居址	大字五明	6 世紀前半
78	模倣坏	東猿見堂遺跡 Q - 8 住居址	大字五明	7 世紀前半
79	模倣坏	東猿見堂遺跡 Q - 8 住居址	大字五明	7 世紀前半
80	有段口縁坏	東猿見堂遺跡 Q - 8 住居址	大字五明	7 世紀前半
81	須恵器坏（身）	東猿見堂遺跡 Q - 8 住居址	大字五明	7 世紀前半
82	甗	東猿見堂遺跡 Q - 8 住居址	大字五明	7 世紀前半
83	模倣坏	高野谷戸遺跡第 2 次調査 R -24住居址	大字五明	6 世紀中頃
84	模倣坏	高野谷戸遺跡第 2 次調査 R -24住居址	大字五明	6 世紀中頃
85	模倣坏	高野谷戸遺跡第 2 次調査 R -24住居址	大字五明	6 世紀中頃
86	模倣坏	高野谷戸遺跡第 2 次調査 R -24住居址	大字五明	6 世紀中頃
87	模倣坏	高野谷戸遺跡第 2 次調査 R -24住居址	大字五明	6 世紀中頃
88	小型甗	高野谷戸遺跡第 2 次調査 R -24住居址	大字五明	6 世紀中頃
89	大型甗	高野谷戸遺跡第 2 次調査 R -24住居址	大字五明	6 世紀中頃
90	有段口縁坏	高野谷戸遺跡第 3 次調査 J -32住居址	大字五明	6 世紀後半
91	模倣坏	高野谷戸遺跡第 3 次調査 J -32住居址	大字五明	6 世紀後半
92	有段口縁坏	高野谷戸遺跡第 3 次調査 E -21住居址	大字五明	6 世紀後半
93	模倣坏	北房ヶ谷戸遺跡 E - 6 住居址	大字五明	6 世紀末頃
94	模倣坏	北房ヶ谷戸遺跡 E - 6 住居址	大字五明	6 世紀末頃
95	壺	北房ヶ谷戸遺跡 E - 6 住居址	大字五明	6 世紀末頃
96	大型甗	北房ヶ谷戸遺跡 E - 6 住居址	大字五明	6 世紀末頃
97	甗	北房ヶ谷戸遺跡 E - 6 住居址	大字五明	6 世紀末頃
98	有段口縁坏	北房ヶ谷戸遺跡 G - 5 住居址	大字五明	6 世紀後半
99	模倣坏	北房ヶ谷戸遺跡 G - 5 住居址	大字五明	6 世紀後半
100	甗	北房ヶ谷戸遺跡 G - 5 住居址	大字五明	6 世紀後半

101	模倣坏	臺第2地点遺跡K-8住居址	大字五明	6世紀中頃
102	模倣坏	臺第2地点遺跡K-8住居址	大字五明	6世紀中頃
103	模倣坏	臺第2地点遺跡K-8住居址	大字五明	6世紀中頃
104	模倣坏	臺第2地点遺跡K-8住居址	大字五明	6世紀中頃
105	小型壺/小壺	臺第2地点遺跡K-8住居址	大字五明	6世紀中頃
106	小型壺/小壺	臺第2地点遺跡K-8住居址	大字五明	6世紀中頃
107	鉢	臺第2地点遺跡K-8住居址	大字五明	6世紀中頃
108	甕	臺第2地点遺跡K-8住居址	大字五明	6世紀中頃
109	有段口縁坏	臺第2地点遺跡H-12住居址	大字五明	6世紀後半
110	模倣坏	臺第2地点遺跡H-12住居址	大字五明	6世紀後半
111	甕	臺第2地点遺跡H-12住居址	大字五明	6世紀後半
112	甕	臺第2地点遺跡H-12住居址	大字五明	6世紀後半
113	礎	臺第2地点遺跡H-12住居址	大字五明	6世紀後半

第4章 町内における鬼高式土器の終焉

番号	資料名称	出土遺跡	出土地	時期（時代）
114	模倣坏	田通遺跡P-21住居址	大字神保原町	7世紀初頭
115	有段口縁坏	田通遺跡P-21住居址	大字神保原町	7世紀初頭
116	鉢	田通遺跡P-21住居址	大字神保原町	7世紀初頭
117	甕	田通遺跡P-21住居址	大字神保原町	7世紀初頭
118	模倣坏	寺西Ⅱ遺跡E-10住居址	大字金久保	7世紀中頃
119	北武蔵型坏	寺西Ⅱ遺跡E-10住居址	大字金久保	7世紀中頃
120	鬼高型高坏	寺西Ⅱ遺跡E-10住居址	大字金久保	7世紀中頃
121	埴	寺西Ⅱ遺跡E-10住居址	大字金久保	7世紀中頃
122	小型甕	寺西Ⅱ遺跡E-10住居址	大字金久保	7世紀中頃
123	甕	寺西Ⅱ遺跡E-10住居址	大字金久保	7世紀中頃
124	模倣坏	北稻塚遺跡L-12b住居址	大字神保原町	7世紀前半
125	模倣坏	北稻塚遺跡L-12b住居址	大字神保原町	7世紀前半
126	模倣坏	北稻塚遺跡L-12b住居址	大字神保原町	7世紀前半
127	有段口縁坏	北稻塚遺跡L-12b住居址	大字神保原町	7世紀前半
128	鉢	北稻塚遺跡L-12b住居址	大字神保原町	7世紀前半
129	鉢	北稻塚遺跡L-12b住居址	大字神保原町	7世紀前半
130	鬼高型高坏	北稻塚遺跡L-12b住居址	大字神保原町	7世紀前半
131	甕	北稻塚遺跡L-12b住居址	大字神保原町	7世紀前半
132	模倣坏	北稻塚第Ⅱ遺跡H-5住居址	大字神保原町	7世紀中頃
133	模倣坏	北稻塚第Ⅱ遺跡H-5住居址	大字神保原町	7世紀中頃
134	模倣坏	北稻塚第Ⅱ遺跡H-5住居址	大字神保原町	7世紀中頃
135	北武蔵型坏	北稻塚第Ⅱ遺跡H-5住居址	大字神保原町	7世紀中頃
136	埴	北稻塚第Ⅱ遺跡H-5住居址	大字神保原町	7世紀中頃
137	台付甕	北稻塚第Ⅱ遺跡H-5住居址	大字神保原町	7世紀中頃
138	小型甕	北稻塚第Ⅱ遺跡H-5住居址	大字神保原町	7世紀中頃
139	大型甕	北稻塚第Ⅱ遺跡H-5住居址	大字神保原町	7世紀中頃

上里町立郷土資料館 令和8年度特別展

「鬼高－ONITAKA－上里町の古墳時代後期」

編集 上里町生涯学習課文化財係・上里町立郷土資料館

発行 上里町立郷土資料館

発行日 令和8年8月15日